

3 地域づくりインターンの活動報告

(1) 1期生活動レポート

中央地区担当 濱 由佳子

鎌田地区担当 塚原 有香

入山辺地区担当 岩垂 綾

四賀地区担当 丸山 裕也

奈川地区担当 松本 尚子

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

中央地区担当 濱 由佳子

1 中央地区の概要及び地域課題

松本市の中心市街地で松本城周辺に位置する 16 町会から構成される中央地区の重要課題は、①二の丸町会の移転 ②マンション居住者と地域における交流であり、課題解決のために中央地区福祉互助会「かかわり隊事業」を通し、地域で支援を必要としている人と支援をできる住民を結ぶ仕組みづくりを行っている。

その中で地区内の中心市街地にある下町会館 1 階にカフェあげつち「サードプレイス=家・職場に続く第 3 の居場所」(ファーストプレイス=家、セカンドプレイス=職場・学校)をつくることで、住民が主体となり生活課題を解決へ導くことが出来る地域の拠点をつくることを目的に下記の取り組みを行った。

2 インターンとして取り組んだ事業

(1) 「サードプレイス」下町会館カフェあげつちの運営

地域に人々が集える居場所を設け、住民が主体となり生活課題を解決へ導き地域づくりの拠点を創ることを目的に、下記の事業を行った。

ア 喫茶運営

住民同士の間人関係を構築し、互いの日常会話から生活課題を聞き住民同士で支援を行うことを目的に、上土町会在住の 60 代から 80 代女性計 5 名とともに喫茶運営を行った。

イ 講座運営

喫茶に訪れない住民の居場所づくりを目的に、下記の事業を行った。

	ア) 英会話	イ) 抹茶	ウ) 習字	エ) よいまちクラブ
実施日	毎月第 2・4(木) 19時から 21時	毎月第 1(木) 19時から 20時	毎月 1回 19時～21時	毎月第 3(日) 13時から 15時
講師	NPOALSA 理事長 中田和子先生	上土町会在住 80代女性	西村陽子先生	元音楽教諭加藤先生
参加者	松本市在住 40 代～70代の男 女 10名程	上土町会の 40 代～80代女性 15名程	松本市在住 30 代～70代女性 10名	松本市在住 50代～90代 女性 35名程
内容	観光客の対応方 法など日常会話 を学んだ。	茶道の作法を 学んだ。	課題の添削を し、競書の級取 得に励んだ。	童謡唱歌を歌い、10月 には中央地区ふれあい祭 りで発表を行った。

ウ 買い物支援ステーション野菜市

実施日：平成 27 年～平成 29 年 5 月～11 月毎週木曜日

内容：買い物弱者問題の解決を目的に平成 27・28 年度は、松本大学生が無農薬野菜・入山辺、奈川地区の野菜販売を行った。また平成 29 年度は、上土商店街振興組合と女性部が生坂村と行ってきた「上土ふれあい新鮮市」にて、入山辺地区の将来ビジョンを考える会「こんな山辺にするじゃん会」の住民と松本大学生が入山辺産の野菜販売を行った。

(2) 中央地区での取り組み

サードプレイスで築かれた関係を基盤に地区での活動を通し、地域づくりの取り組みへつながるよう下記の事業を行った。

ア まちなかギャラリー・中央地区写真展

実施日：平成 28 年 10 月 15 日（日）・平成 29 年 10 月 22 日（日）

内容：中央地区ふれあい祭りにおいて塚原と共催し、地域住民から江戸時代から平成の生活用品と写真を募集し、約 60 品目の展示を行った。

イ 大手公民館事業「中央地区育児の集い」親子工作

目的：未就園児を持つ母親の居場所づくりと子育て支援

実施日：平成 29 年 12 月 12 日（火）

内容：福祉ひろばと公民館事業「中央地区育児の集い」と松本大学生が下町会館で行う「ホッとコーヒー飲みませんか？」が連携し、工作を行った。

ウ 旧松本電気館保存再生事業プラン策定に係わる委員会

目的：地域づくりの拠点として旧松本電気館再生を行うためのプランの策定

内容：ア) 旧松本電気館保存再生事前検討委員会：平成 28 年 11 月から
イ) 旧松本電気館保存再生事業プラン策定に係るプロジェクトチーム事務局業務：平成 29 年 11 月 6 日（月）発足

(3) コミュニティビジネスによる松本市における着地型観光の立案

目的：地域課題解決を目的に資源を活用したコミュニティビジネスの立案

内容：平成 27・28 年度は地域課題・資源調査、29 年度には飯田東中学、飯田 OIDE 長姫・白馬高校、日本・明星・松本大学生を対象に模擬ツアーを行うことで人財資源・観光事業を行う上での課題調査を行い、NPO 法人による着地型観光事業の作成を行った。（事業計画は平成 29 年研究論文を参照）

3 事業の成果

(1) 「サードプレイス」下町会館カフェあげつちの運営

ア 喫茶運営

年間延べ約 6000 名が訪れ、地域づくりの拠点において人間関係が構築されたことで互いの生活課題を住民同士の関わりから解決へ導く環境が生まれた。また平成 30 年度以降も上土町会・上土商店街振興組合・上土

女性部が中心となり、運営が継続される予定である。

イ 講座運営

喫茶に訪れない住民や日中仕事を行う住民が訪れる拠点・環境づくりを達成した。今後は上土商店街女性部が運営を行うことで、住民が主体となり講座運営が継続される予定である。

ウ 買い物支援ステーション「野菜市」

松本大学生による販売から平成 29 年度には住民主体による販売へ移行し、平成 30 年度以降も上土商店街振興組合・女性部、入山辺地区の将来ビジョンを考える会「こんな山辺にするじゃん会」との連携により運営が継続される予定である。

(2) 中央地区での取り組み

ア まちなかギャラリー・中央地区写真展

平成の街並みの写真を展示したことで、町会長から現在の各町会の街並みを撮影し遺す必要があるのではとの意見を頂いた。また提供いただいた品を基に、平成 29 年 1 月に大手公民館歴史講座が行われた。

イ 大手公民館育児の集い親子工作

母親が工作をする横で、大学生が新聞を入れたプールやままごとを用い子どもと遊ぶことで、母親がゆっくりとくつろぐ時間と居場所をつくった。今後は、子育て中の悩みを互いに話すことのできる関係づくりを目的に大手公民館と大学の活動の連携を進めたいと考えている。

ウ 松本電気館保存再生事業プラン策定に係わる検討委員会

(株) 斉産土地組合からプラン策定の了解を得たことで事前検討委員会を経て、正式な委員会結成へと至った。平成 29 年 11 月には「歴史的建築物を活かしたまちづくりのあり方を考える松本電気館シンポジウム」が開催され、12 月には建築士による現場調査を行った。今後は、上土町会・上土商店街振興組合が主体となり地域活動の拠点づくりへ向けてプラン策定を進める。

(3) コミュニティビジネスによる松本市における着地型観光の立案

松本市において住民が主体となり、行政・大学・企業が連携を図った着地型観光事業計画を作成したことにより、地域づくりインターンとしての取り組みから明らかになった地域課題の解決を目的に、地域資源を活用し今後私自身がどのような形で地域活性化事業に携わるべきか具体化した。

4 3 年間を振り返って

中央地区でのサードプレイスづくりを通して、今後住民主体の地域づくりを行い継続するためには、各地域において住民が人間関係を構築するための拠点が必要であることが明らかとなった。またこのような拠点を設けることで地域活動に対する話し合いの場として活用されることにより、地域づくりへと発展していくことが明らかとなった。

このことを通じて、私自身は旅行や観光を通してこれまで立案した地域資源

を活用した地域課題解決型の着地型観光の実現へ向け、実務経験を身に着けたいと考えている。またそのために、これまで住民とともに築いたサードプレイスにおいて住民との関わりを持ちながら、サードプレイスにおいてDMOとの連携を図ることで、観光によるまちづくりを進めていきたいと考えている。

写真資料

(1) サードプレイス下町会館カフェあげつちの運営

① 喫茶運営



② 講座運営 (ア) 英会話



(イ) 抹茶



(ウ) 習字



(エ) よいまちクラブ



② 買い物支援ステーション



(2) 中央地区での取り組み

① まちなかギャラリー
中央地区写真展



② 中央地区育児の集い



③ 松本電気館再生事業



(3) コミュニティビジネスによる松本市における着地型観光の立案



松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

鎌田地区担当 塚原 有香

1 鎌田地区の概要及び地域課題

鎌田地区は奈良井川と田川が合流する位置に形成された湧水地帯に位置している。比較的早い時期から開発された地域と明治以降、あるいは昭和 20 年以後に開発された地域があり、現在も宅地開発が進められており、古くから代々住んでいる住民と新しく移り住んだ住民とが混在している地域である。地区内には、陸上自衛隊の駐屯地や松本市文書館などの公的機関があることも特徴である。地区は 17 町会から構成され、人口及び世帯数は 19,444 人、8,848 世帯で、松本市 35 地区の中で市内一の人口規模である。高齢化率は 21.4%と低く、松本市の平均(27.3%)を 5.9%下回っているものの、年々増加傾向にある。

地域課題としては、一つは立地である。鎌田地区は市街地にあり、公共交通機関も比較的整った地区ではあるものの、地区内を国道 19 号線が通って分断されているため「鎌田地区」としての意識が薄い傾向にある。さらに、地区内には小中学校が各 2 校あり、通学区が地区内で異なるということも、地域住民の地区としての意識を薄くしている要因であると考えられる。

二つ目として高齢化である。鎌田地区の高齢化率は比較的低い傾向にあるが、町会単位でみると大きな差がある。地区内で最も高齢化率が高い町会(中条町会 43.4%)と低い町会(井川城中区町会 13.2%)を比べてみると、約 30%と非常に大きな差がある。鎌田地区は現在も宅地開発が進み、住宅が増えているが町会もあれば、空き家の増加がみられる町会もある。土地にも限りがあるため今後、高齢化や人口減少といった問題が生じてくると考えられる。

三つ目として、地域づくりやまちづくりに関して総論賛成していても、自身に関わる問題、課題として捉えている人が一部(少数)だけという現状である。鎌田地区は、上記でもあるように公共交通機関や商業施設が整っているため、日常生活に苦勞をすることは少なく、町会に加入をしない世帯も多くいる。高齢化率や空き家問題、少子化なども全体で見れば低い傾向であるため、目に見えた地域課題というものは一見無いようにも感じてしまう。また、町会ごとの高齢化率や世帯数などに大きな差があるため、地区としての共通の課題や問題を設定することが難しく、地域づくり“や”地区をこうしていきたい“という意識が薄いように感じる。しかし、町会単位での活動は活発であり、地域包括ケアや町会の今後を考えて独自の活動をしている町会もいくつかある。

地域づくりインターンとして鎌田地区に関わる中で上記のような特徴、地域課題を見出すことができた。これらの課題や特性を踏まえながら活動を進めてきた。

(人口・世帯数・高齢化率は平成 29 年 10 月 1 日現在の数値)

2 インターンとして取り組んだ事業

地域づくりインターンとして取り組んだ事業は大きく分け三つある。

一つ目は『お宝発掘事業』である。この事業は、鎌田地区の新たなお宝を見つけ出し、地域の魅力を再発見するとともに、より多くの地域住民に知ってもらうことを目的として行った事業である。初回は発表会と題して、各町会自慢のお宝を持参してもらい、町会の方に説明してもらった。2回目以降はより多くの方に観てもらうために鎌田地区文化祭に合わせて展示コーナーを設け、キャプションをつけて展示した。お宝は井川城跡やお八日念仏の掛け軸と数珠といったよく知られているものから、そば打ち名人やお神輿など町会住民しか知らないお宝も集まった。



写真1 お宝発表会の様子



写真2 お宝展示の様子

二つ目は『キッズクッキング』である。公民館や福祉ひろば事業に携わる中で、鎌田地区在住の子ども向けに食育講座の一環として企画した。この事業は芳川地区に所属する地域づくりインターンの伊藤との共催事業の一つでもあり、企画段階から入ってもらった。周知に関しては公民館だよりを通して行い、地区公民館と同じ敷地内にある児童センターにも周知をお願いした。当日は松本大学健康栄養学科の学生とも連携をして、料理教室を行った。平成29年度は福祉ひろばと共催で新たな企画をする予定である。(平成30年3月開催)



写真3 キッズクッキング



写真4 ワークショップの様子

三つ目は『ワークショップ』である。平成28年度に誰一人取り残さない地域社会づくり研修プログラム開発事業((公財)日本障害者リハビリテーション協会主催)の一環としてワークショップの手法やネットワーク形成について松本大学地域総合研究センター特別調査研究員として学んだ。

同年に新村地区において、同地区所属の地域づくりインターン一色を中心に「できることもちよりワークショップ」を実施したことから、平成 29 年度に鎌田地区においても地域の課題(事例)を一人ひとりが現実的に受け止め、役職など関係なく、活発に話し合える機会を作りたいという思いから、地域住民向けに「できることもちよりワークショップ」を開催した。開催するあたり、プレ研修会に地域住民として、民生委員の方にも出席していただいて手法やワークショップの意図について知ってもらったり、地域包括支援センターや保健師、町会役員とも連携して、鎌田地区の実情に沿った事例を作成したり、地区に根ざしていけるような形で行った。当日は、25 名(地域づくりインターン生含め)が参加し、困りごとを抱えている人の事例を基に自分のできることを挙げながら、支援のあり方や関わりについて考えた。

3 事業の成果 (事業実績結果、住民意識の変化)

(1) お宝発掘事業

初年度は誰もが知っているものが多く出品されたが、回数を重ねるにつれて、町会でしか知らないお宝も出品されるようになった。特に航空写真は町会だけではなく地区の変遷も分かるものであったので、他町会の方たちの関心が高かった。また、お宝として人を紹介する町会もあり、そば打ち名人や表具師、百名山を全て登頂したご夫婦など鎌田地区における人材発掘にも繋がった。地区の魅力を再発見するためにしていた事業であったが、第 1 回目の「お宝発表会」ではそれぞれの町会の方に発表、実演をしていただき、住民同士の交流の場となった。また、企画については町会連合会に協力を仰ぎ、各町会のお宝発掘は町会長を中心に行ってもらった。各町会(町会長をはじめとする役員、地域住民)が探すところから関わってもらうことによって、自分たちで地域資源、地元の魅力を探すということ、それに気づくという意識付けができた。

しかし、発掘されたお宝には更なる活用方法があるように感じる。人材であれば、達人紹介として公民館講座や学校サポートに関わっていただくようなシステムの構築や、古いもの(文化財や骨董品)であれば、鎌田地区の歴史調査としてそれらのものから町会、地区の歴史を紐解いていけるのではないかと考える。

(2) キッズクッキング

募集段階から問い合わせが多く、子どもたちの関心の高さが分かった。当日は募集定員の 20 名が参加し、地域づくりインターンの伊藤を講師にちぎりパン作りをした。型作り(牛乳パック)やラッピングなども簡単で家でもすぐできるような工作をするイメージでできるものにして、子どもたちが楽しく作れるように工夫をした。参加した子どもたちは、分からないところは教えあったり、栄養学科の学生とも積極的に話をしていたりと子どもの自主性を促すことができた。

小さい頃から地域振興、生涯学習の拠点である公民館に関わって楽しい思

い出を作ってもらい、高校生や大学生になってからも気軽に公民館や町会事業に関わってもらえるように、引き続き3月の企画に向けて力を入れていきたい。

(3) ワークショップ

当日扱った事例は、①認知症の家族、②外国人の子ども、③若者の引きこもりをテーマにワークを進めていった。中でも③の事例では、実際に経験された方が偶然参加して下さったこともあり、実体験を話してくれたことが他参加者の勉強になったようだ。参加者の意見としては「自分が他の人とは違う考え方をしているということがよく分かった」「一人で考えるより皆で考えると色んな意見が出て、気づかされた」など、ワークを通して自身の地区、町会ではどうできるかなどを考えてくれる方が多くいた。

そして、今後ワークショップで取り上げてほしい事例(テーマ)について聞いたところ「隣人との交流を望まない住民」「独居者」「子育て」などが挙げられ、鎌田地区の新たな地域課題が見えてきたことも成果の一つである。

また、このワークショップ開催後、地域包括支援センターからの依頼があり、地域ケア会議(ブロック別)においても同ワークショップの手法を一部用いてグループワークを行った。出席者は町会長、民生児童委員、健康づくり推進員、地区内介護保険事業所、地区担当職員などが集まり、「困る前から相談し合える関係作りをしていくには？」というテーマのもと、地域包括支援センターで考えた事例「認知症の妻の介護をする夫の悩み」を通して意見交換を行った。

4 3年間を振り返って

地域づくりインターンとして配属された当初は、市内でも有数の人口急増地帯であり、公共交通機関も整備され、近くに商業施設や公共施設もある鎌田地区に地域づくりが必要なのか、何をしていくべきなのか分からない時期があった。地区を知るにつれて自分のやりたいことと地区として必要なこと、求められていることが違うような気がしてうまくいかないこともあり、改めて地域づくりの難しさを実感した。

鎌田地区は複合施設ということもあり、福祉ひろばや児童センターの事業に携わる機会が増え、子どもから高齢者まで幅広い年代の方と話をしたり一緒に行動したりすることが多くあった。そういった中でできた人間関係や地域の中の様々な活動(町会役員の仕事や行事、行政の関わりなど)を知るにつれて、地域づくりインターンとして鎌田地区において何ができるのか、地域づくりをより深く考えるようになった。

地区の中での活動では、福祉や食育など様々な事業や講座を提案したり携わってきたりしたが、どれも地域の方や職員の方たちは私がやりたい旨を伝えると協力してくれると共に後押ししてくれてとても感謝している。

この3年間、地域づくりインターンとしてより実践的に地域づくりを学び、協働することを知り、任期が終わった後も松本市で地域や地域づくりと関わっ

ていたいと感じた。今後は、学芸員として別の視点から地域と関わっていけるよう努めていきたい。

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

入山辺地区担当 岩垂 綾

1 初めに

私は大学卒業後数年間、企業で働いた経験があったが、地域社会という意味ではそれなりの制約があった。松本市地域づくりインターンシップ戦略事業のことを知り、より行政に近い立場で地域に密着した仕事に携わり、新たな目線で地域づくりにかかわりたいと考え、地域づくりに関する調査・研究を進めながら、松本市の政策がどのように活かされているかを現場で勉強するためインターンに募集した。

2 入山辺地区の概要及び地域の現状・課題

入山辺地区は、松本市の東山部に位置している。地区の面積は 76.66 ㎥と広いが、95%は山林が占めていて薄川沿いに集落や耕地が広がる中山間地である。高齢化率は、40.5%（平成 29 年 3 月 1 日現在）と市内他地区に比べて著しく高く少子高齢化・人口減少が進んでいる。中でも若者の人口流出が地域の第 1 の課題になっている。

地場産業は農業で、中山間地として経営規模面積は小さく、専業農家は少ない。傾斜地、寒暖差、日照等地域の特性を生かして明治初期から葡萄栽培が行われ、現在も新品種の栽培に取り組むなど山辺葡萄の産地として知られている。

もともと兼業農家が多い中、農業の担い手も高齢化が進んできたことや後継者不足の結果、水田・普通畑や一部果樹園にまで耕作放棄地が出ており、特に耕作し辛い土地の荒廃により里山と山林との境界線がなくなり、有害鳥獣被害が拍車をかけ耕作放棄農地が拡大した。地区全体に防護柵が張り巡らされが、道路、川等は締め切れず、また、防護柵内に生息する数も多く完全に被害防止には至っていない状況で、後継者不足と荒廃農地対策が第 2 の課題となっている。

そのような状況に直面し、地域づくりを進めるために「入山辺地区の将来ビジョンを考える会（愛称こんな山辺にするじゃん会）」が発足し、地域課題解決に向けた取り組みが始められ、毎月第 2 火曜日に定例会が行われている。

新たな課題として、公共交通であるアルピコ交通入山辺線が利用者減少により不採算路線の見直しの対象となり、路線バス廃止後の新たな交通対策の模索がされた。

3 インターンとして取り組んだ事業

(1) 野菜市

前記の地域課題の中から地域の特徴を活かし、1 年目である平成 27 年度は、中山間地域における農産物を通じた高齢者の生きがいづくりと次世代の担

い手づくりをテーマに、入山辺の農産物を集め中心市街地である上土地区で、週1回野菜市を開催し上土地区に訪れる松本大学生と入山辺の農産物を通して上土地区の高齢者との交流を図ると共に出荷する生産者の生きがいくりに取り組んだ。

平成28年度である2年目は、野菜市を私自身が運営を主にするのを一旦辞めて、前年度から、松本大学・白戸ゼミナールの学生と共に行っている経緯から主に、学生に活動をしてもらい、私はサポート役として地域間交流と異年齢交流を図るべく取り組みをおこなった。

(2) かわら版の発行

当初、地域づくりインターンとしての存在を知ってもらう目的で、隔月で自身の入山辺の活動の報告を「かわら版」として地区内（全戸配布）に発行していたが、入山辺地区内で、自分の集落以外の情報を知らない住民が多いという声を聴き、自身の活動報告の他に、集落の行事の情報発信をプラスして行なうことで、より住民が自分の集落外のことを知るきっかけづくりとなる様に取り組んだ。

(3) 有害鳥獣対策

入山辺地区内で、有害鳥獣の被害が多く、集落捕獲隊はあるものの高齢化が進み、機能していないという問題があるということが活動をしていく中で分り、自身も何か一役かえないかと思い、わなの狩猟免許を取得した。

(4) 商品開発

野菜市を実践していく中で、消費者から入山辺の農産物の高評価や、要望が高かったことを実感し、出荷者は、難色を示していた地域住民の中での、高評価されているという実感が、自信へと繋がり入山辺のぶどうを生かしたことが、できないかと考え新たな試みとして、特産品の開発を試みた。

(5) 交通対策

初年度の平成27年度より、買物支援からみた、中山間地における地域交通の再生と地域づくりをテーマに、入山辺地区における地域主導型交通の事例をもとに地域課題である、交通弱者問題として地域公共交通の再生と住民の主体性について取り組んだ。

(6) こんな山辺にするじゃん会への参加

地域の課題解決に向けて、地域住民と一丸となって月1回の定例会に出席し、分科会やイベントなどの企画に参加し取り組んだ。

(7) 3年目の取り組み

29年度は、取り組んできた事業をいかに、地域の中で、継続し地域が主体となって取り組んで行けるのかという点と、3年間の事業の集大成として今後、自分自身の活動が継続される取り組みを行った。

4 取り組み事業の成果

(1) 野菜市

野菜市の存続について多いに悩んだが、元々入山辺農村女性部が里山辺・湯の原地区で野菜市を行っているので、上土地区の野菜市も継続して行くこととなり、有志主体で運営を行い、毎週1回ふれあい野菜市を開催することで、生産者の販売向上意欲と両地区の地域間交流・異年齢交流・高齢者の生きがいがづくりに繋がった。

このことは、住民主体で、地域内から地域外へ自分の地区の良さや地域課題を自ら、解決法を再確認し模索する成果となったことと、外に目を向け、行動に移す大きなきっかけとなった。

(2) かわら版

高齢者から行事や風習を教わることで、高齢者の生きがいがづくりに繋がったことと、多くの伝統文化を地域内で、情報共有することができた。当初は、自身で取材に行っていたが、徐々に地域住民からの情報提供が多くなったことで、地域での情報共有とインターンという存在の認識ができた。

更に、各集落での行事を公民館事業で「入山辺地区行事暦」として編集することへと繋がった。

(3) 有害鳥獣対策

集落捕獲隊はあるが、猟友会員が少ないことから、私が、わなの免許を取得したことで、平成27年度から町会役員などが免許を取得してくださり、徐々にだが意欲的にわなの免許を取得してくれるきっかけになった。

元々、防止柵を地区全体で張る作業を行っており、有害鳥獣被害防止対策には意欲的ではあったが、わなをかけるなどといった特別な対策は、免許がなければ中々難しいこともあり、自分の地域を有害鳥獣の食害から、農作物を守るという意識になり免許取得という形に繋がった。

(4) 商品開発

先にも上げたように、野菜市を通して地域へ外からの評価や要望が大きかったことから、地域の資源の可能性に目を向けた取組をおこなうことを検討した。昔から、『山辺ぶどう』は、中信地区における地域ブランドとして名が通っているが、中信地区の外へ出れば『山辺ぶどう』の認識度は必ずしも高くない。

『山辺ぶどう』の生産者も減る中、ぶどうをPRするにはどうしたら良いかと考え検討したところ、巨峰を用いた干しぶどう作りをしている生産者の方が『するじゃん会』の会員の中に、いらっしゃったことから、この干しぶどうを使って入山辺地区外へ特産品としてPRしていくことができないかと検討した。

商品開発に当たっては、大森女礼氏（まつもと城町コンシェルジュ）にコーディネーターとして入ってもらいながら、入山辺地区に30代女性デザイナーがおり、パッケージや商品の帯ラベルなど若い女性に向けて、お土産物と

して商品にできないかと一緒に考え、新たにりんご・梨のドライフルーツの商品化に繋がった。

(5) 公共交通対策

2年目の、平成28年度にアルピコ交通入山辺線の廃止決定に伴い、対策委員会により代替交通となる地域主導型公共交通に向けた取り組みが始まった。地域の足という認識が強かったことから、住民自らの手で、雨氷木を使ったバス停を一から作っていくということとなり、地区のデザイナーと一緒にデザインを考え、製作をしたことで、愛着が湧き、より一層自分たち地域のバスという意識に変わり、新たに地域主導型公共バスの運行に繋がった。

(6) こんな山辺にするじゃん会

月1回の定例会に参加し、事業の計画を話し合い、地域の課題解決について、提案・協議・実行をすることで、地域住民との課題の共有を図ることができ、そこで議論をしていたことが、野菜市や商品開発という形になった。

5 3年間を振り返って

松本市地域づくりインターシップ戦略事業において、入山辺地区を活動拠点としていく時に、取り組むべき地域課題を絞ることに主眼を置いた。地区を超えた対策がおおきば課題解決ではなく先ず、自身に取り組める身の丈にあった事と地域課題を考えることにした。

自身が出来ること、必要とされていることにアプローチすることで地域が変化するであろうと考えながら、地域の課題になっていることの1つとして、自身が携わってきた農産物の有効利用や有害鳥獣駆除の問題を対象にした。初年度は、アプローチを地域活性化組織である「こんな山辺にするじゃん会」に相談しながら、農産物利用法と罟の配置等に取り組んだ。

だが、地域愛が強いこと・農産物に対し、誇りを持っていることで、中々賛同が得られず、どのようにして地域に入っていくのかとても悩んだ。

私の意識の中で、地域づくりをするために入山辺に入ったのだから、入山辺地区の多くの方々に認めてもらわなければという気持ちが強すぎ、当初の計画は失敗に終わった。

だが、どうしても入山辺の大きな特徴でもある農業を地区外へと発信し、PRしたいという思いから、地区のキーマンとなる人物に相談をし、失敗に終わった事業を今一度計画し直した。

まず、地区の方に認めてもらうには、自身の行動を知ってもらうことで、理解が深まるのではないかと考え、地道に取り組んだ。

当初、反対していた人も、2年目を向かえ地区の事業やこんな山辺にするじゃん会のハナモモの植樹などで顔を合わす機会が多くなり、一緒に作業をするうちにお互い地区でやりたいことや意見が共通していたことが分り、行き違いが生じていたことに気づき、今では、最大の味方になって3年間やってきた、野菜市の活動をはじめ、地域の食を通じて子ども達との交流を主体となって行なってくれている。

以上の点から、話し合いの進め方をどのように工夫するかが非常に重要だと今更ながら実感した。地域の特性を踏まえ、そこでの古くからの慣わしや習慣など地域の歴史をベースにアプローチすることで、地域の方との信頼関係も生まれることを痛感した。

だが、信頼関係が生まれたことによりデメリットも生じ、関係性が近くなりすぎたことから、特定の人ではあるが、主体的に自ら活動をするのではなく、私自身に活動を依頼する頻度が多くなった。そのため、主体的に活動してもらうための促しや、共同作業などをやるのが当たり前になってしまったことから本来の目的であった、担当地区での地域住民との共同参加という位置づけではなくなってしまった点は反省点である。

一方で、入山辺地区は地域のまとまりがあり、連帯感があることが地域の特性だということも分った。

きっかけさえあれば、住民主体で行動できるマンパワーを持ち合わせているのだ。そのため、いかに地域の魅力を引き出し行動へ繋げられるかという点を意識し3年間という短い期間であったが取り組んできた。

最後に、入山辺地区であったからこそ、自身のポテンシャルを最大限に活かしたことで、自身が、地域住民に対し、活動のきっかけづくりを仕掛けたように発案したが、結果的に多くの取り組みを住民にサポートをしてもらい、地域の活動として定着して行ったのだと思う。

若者だから、地域で育てなくては成らないと言う意識ができ、携わってくださった地域の多くの方々に育てていただいたことで、地域との関りかたや自身の地区のことをより考え、地元で暮らしていくために必要なことは何であるのか、地域と関わっていく中で多くのことを学び吸収できたように思う。

何が地域課題か、については誰しも共通認識があること、にもかかわらず危機感の強弱のため、問題をどのようにアプローチするかが人それぞれに違い、具体的な活動へ繋がり難いという、極めて現実的な問題を身を以て体験できた。自身にとって、大きな財産となった。

まだまだ、やり足りない事業もあるが、次のステップに向け、3年間の活動を活かし、地元還元していきたいと思う。

6 活動紹介写真



するじゃん会たんぼのわプロジェクト田植え作業の様子

「山辺ぶどう」を使用した巨峰の干しぶどう



野菜市 1年目の様子



野菜市 2年目の様子



野菜市 3年目の様子



入山辺線運行式の様子



雨氷木をバス時刻表製造の様子



入山辺線のロゴデザイン



バス時刻表完成図

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

四賀地区担当 丸山 裕也

1 四賀地区の概要及び地域課題

平成17年4月に松本市に編入合併したかつての四賀村である四賀地区は松本市の北東部に位置し、東は青木村・上田市、西は安曇野市、北は筑北村に隣接する。標高1,629mの戸谷峰を最高に、四方は1,000m級の山々に囲まれた小盆地であり、約80%を森林が占める自然豊かな農山村地域である。

四賀村時代には基本目標の「地球環境に根ざす新しい生活とまちの創造」と「エコ・ビレッジ四賀」をスローガンに掲げ、米や野菜の無農薬有機栽培や養鶏、森林燃料の生産など、農林業が盛んに取り組まれてきた。現在も豊かな自然環境に配慮した有機循環型社会の構築を目指し、「ゆうきの里づくり」に取り組んでいる。そのなかでも、四賀村のまちづくりの大きな特色の一つとして挙げられるのは、日本で先駆的事業となったクラインガルテン（Kleingarten）の建設であろう。クラインガルテンとはドイツ語で「小さな庭」（klein=小さい、garten=庭）を意味し、19世紀初めにドイツで始まった農地の賃借制度であるが、日本では「滞在型市民農園」と言われている。このクラインガルテンは遊休荒廃地を利用し、都市部と農村部の地域の人々が交流することも目的に建設されており、四賀村では地元住民のボランティアの方々が「田舎の親戚」となって農業のアドバイスをを行いながらクラインガルテン利用者との交流を行ってきた。そうした人と人とのつながりを感じることができるのも農山村地域ならではの魅力であろう。

また、四賀地区の良さは自然環境だけでなく、長い歴史と多くの文化も魅力的である。古くは街道が通り、宿場町として人々の往来でにぎわい、交通の要衝として栄えた四賀地区は今でも宿場町のまちなみが残っており、当時の面影を感じさせる風景が所々に残っている。また、平成20年には旧会田中学校跡地に室町時代の大規模な建造物の造成跡や石積群をもつ殿村遺跡が発見され、高級な陶磁器や貴重な茶道具なども出土している。さらに、四賀地区の住民にとってのシンボルとも言える「会田富士」と呼ばれる虚空蔵山一帯には、歴史ある多くの寺や神社があり、社寺文化財や石造文化財が多数現存している。

その他の文化的資源として、「四賀コンサート」や「四賀一周駅伝大会」、「虚空蔵山米かつぎマラソン」など四賀地区独自のユニークな催しも多い。それらの地域資源を今後どのように活用し、地域づくりにつなげていくのかを考えていく必要があるだろう。

そして何より四賀地区の喫緊の課題であるとも言えるのは、人口減少と少子高齢化であろう。故に地域内で見守る者が減り、見守られる者、助けを必要とする人々が増えているといった状態である。四賀地区の人口は4,618人、

高齢化率は41.3%と市内35地区のうち3番目に高い（平成29年12月1日現在）。人口と高齢化率の推移を見ると、昭和30年代からの高度経済成長に伴い、兼業農家の増加と若者の都市への流出等により過疎化が進み、人口は減り続け、高齢化率は上昇する一方である。このように人口減少・少子高齢化が進む地域では、地域の将来を担う若手の人材の育成と確保が困難であり、地域行事や町会などの運営に支障を及ぼす恐れがあり、コミュニティの存続が危ぶまれている。

しかしその一方で、近年は「農村回帰」を志向した幅広い世代が四賀地区内へI・Uターンによって移住している。なかでも、エコ、オーガニック、パーマカルチャー（持続可能な暮らし方）に関心を持った若い世代も多く、四賀地区の風土を活かした仕事おこしに取り組んでいる人々もおり、そのような農村回帰志向を持った若者たちの新しい力と地元の住民とがいかに力を合わせ、地域づくりに取り組んでいくのが重要であろう。

以上の四賀地区の現状と課題をふまえ、私は以下のような活動に取り組んできた。

2 インターンとして取り組んだ事業

(1) 四賀地区地域づくり協議会の事務局として

ア 各種会議・事業などへの参加

私をはじめに取り組んだ活動は、「四賀地区地域づくり協議会」（以下「協議会」という。）の事務局としての業務である。協議会は、平成27年6月28日に設立総会を開催し、発足した。それ以降、協議会の役員会をはじめ、各部会の会議や事業に参加させていただきながら、四賀地区の良さと魅力や地域のキーマンとなり得そうな人材の発掘に取り組んだ。そのなかで、地域で困っていることはどのようなことなのかを知ることにつながり、四賀地区の地域資源と地域課題などが少しずつ見え始めた。また地域住民の皆さんとの交流も徐々に増え、顔見知りの関係を築くことができ、そうした人脈はその後のさまざまな活動につながっていくこととなった。

イ 「ゴミを捨てさせない運動」の取り組みから

協議会の会議の中で、地域内の沿道や河川、山中などにおいてごみの不法投棄が目立ち、四賀地区の自然環境が損なわれているといった意見が挙げられたことをきっかけに平成27年度の協議会の全体事業として「ゴミを捨てさせない運動」を計画した。そこで私は、どのような趣旨目的で、どのような活動に取り組んでいくのかを協議会の役員会をはじめ、各部会において企画提案させていただき、平成28年3月5日に実施する運びとなった。協議会発足2年目である平成29年度にもこの事業を継続して行い、協議会に所属する多くの住民の皆さんが参加し、ごみ拾いによる環境美化作業と環境美化の啓発活動に汗を流しながら取り組んだ。「ゴミを捨てさせない運動」により多くの地域住民が集い、さまざまな人々がコミュニケーションを図る貴重な機会と

なり、地域づくりに取り組む機運も高まったように思えた。

ウ 「四賀地区のこれからを考えるワークショップ」企画開催

四賀地区の住民の皆さんと関わる中で、I・Uターンによる移住者が多くいることがわかり、そういった移住者と関わりを持ちたいが、関わるきっかけがないということを経験した。また反対に、移住してきた方々の中にも地元の住民の方々とコミュニケーションを図ることができずにいることもわかった。そこで、協議会の地域振興活性化部会事業の「地域住民参加型（小・中学生等を含む）ワークショップの開催」として「四賀地区のこれからを考えるワークショップ」を開催し、四賀地区で生まれ育った方々と新たに四賀地区へ移住してきた方々とが結びつくきっかけとなればと考え、新旧住民を交えた意見交換会を行った。

またこの機会に、参加者にはアンケート調査にご協力いただき、地域の魅力と良い点・悪い点などについて回答していただいた。そして、移住者の方には四賀地区へ移住された経緯と移住後どのような暮らし方をされているのかもご紹介いただく場を設けたことで、新旧住民の新たなつながりが生まれ、これからの四賀地区の地域づくりにむけての大きな一歩となったのではないかと感じた。

(2) 「四賀にきましょ実行委員会」への参画

「四賀にきましょ実行委員会」とは、四賀への移住者を中心に組織され、四賀地区の地域活性化を目的に地域の魅力を地区内外へ発信している団体である。これまでに、廃校舎や公園など四賀地区内の既存の施設を活用し、昔ながらの文化や暮らし、ものづくりの体験型ワークショップイベントを開催してきた。しかし、この事業でも新住民と旧住民との連携が薄いように感じられた。そこで私は、実行委員会以外の住民の方々に応援していただくような体制づくりを考え、四賀地区町会連合会や協議会の会議の場面や、マスコミを通じてのイベント開催の周知を図った。また、松本市役所の地域づくり課や四賀地区地域づくりセンター、四賀公民館などの職員の方々にも協力を仰いだ。その結果もあってか、最近では新旧問わずの多くの住民の方々からも地域の盛り上がりへの期待と応援の声が徐々に大きくなり、新旧住民が力を合わせてこの事業に取り組む姿勢も見られるようになってきた。

(3) 「地域の拠点づくり」構想

四賀地区の人口減少や若者の流出と高齢化などを背景に、地区内の商店は担い手不足により衰退しており、地区内には住民が顔を合わせ、交流できる場が減っている。これではコミュニティの機能や活力が衰退していく一方であろう。このような現状をふまえて、協議会では地区内に住民が集える「拠点」が欲しいという意見が挙がっており、農業協同組合（以下「農協」という。）が使用していた建物の跡地を活用した地域の拠点づくりを構想していた。そ

こで私も、大学時代に白戸ゼミナールにおいて松本城下町「上土商店街」のまちづくりに取り組んだ経験を活かし、企画書を作成し、住民の皆さんに『里の駅「四賀マルシェ」を核とする地域づくり』という拠点づくり構想の企画提案をしてきた。しかしこの構想は、農協の建物跡地の利用賃借料の面で話がまとまらず、この地を拠点にすることは断念することとなった。それ以降、拠点づくりについてはなかなか進んでいないのが現状であるが、この構想を住民の皆さんと共有できたことは今後の展開へつながっていくのではないだろうか。

3 事業の成果

(1) 四賀地区地域づくり協議会の事務局として

ア 各種会議・事業などへの参加

まずは四賀地区について知ることから始めようと協議会事務局の一員として各種会議や事業に積極的に参加した。そのなかで地域住民が普段の暮らしの中でどのようなことに困っていて、どのような不安を抱えているのかを聞くことにつながった。そういった困りごとや不安は多くの方が共通して感じていることもあれば、各自違った視点や見方で捉えていることもあり、住民同士が白熱して意見を言い合う場面もよく見られた。このように、住民の方々が地域について真剣に考え、地域に対する思いや愛着を肌で感じ、私自身3年間という限られた時間の中でどのようなことができるのだろうかと考えさせられた。こういった協議会事務局としての取り組みがその後の活動のヒントとなり、「ゴミを捨てさせない運動」の実施や「四賀地区のこれからのを考えるワークショップ」の開催、「地域の拠点づくり」構想などといった活動につながっていった。そしてまた、協議会をきっかけに多くの地域住民の方々と出会うことができ、日常的なあいさつや会話を通したコミュニケーションにより顔見知りの関係をつくることにつながっていった。

イ 「ゴミを捨てさせない運動」の取り組みから

協議会の活動において地域住民の方々が地域づくりに協働していくきっかけとなったもののひとつとして「ゴミを捨てさせない運動」があると思われる。この事業では多くの地域住民が参加し、地域の環境美化活動と不法投棄の禁止を呼びかける啓発活動に取り組んだ。この活動を通して、住民自らの目で自分たちが暮らす地域がきれいになっていく様子を見たことで、改めて自分たちが暮らす地域のことを考え、地域への愛着を感じる機会になったのではないだろうか。このように、自分たちが暮らす地域を見つめなおす活動に取り組んだことが、その後のさまざまな行動につながっていったものと思われる。

ウ 「四賀地区のこれからの考えるワークショップ」企画開催

この事業では、参加者に「地域の魅力」や「地域の課題」、また「将来は

どのような地域にしていきたいのか」、「その理想にむけてどんな取り組みを行っていくのか」といったテーマを設定し、意見交換を行った（表1）。また移住者の方々からは、さまざまな選択肢の中から「なぜ四賀地区を移住先に選んだのか」という移住を決めるまでの経緯や四賀地区に魅力を感じた点などについてお話しを聞くことができた（表2）。そういった移住者を感じる四賀地区の魅力を地元住民と共有できたことは、旧住民にとっては自身が生まれ育ったふるさとの魅力を再発見する機会となったのではないだろうか。また、この事業は移住者が営むカフェを会場としたことで、新旧住民の新たな出会いが生まれ、その後の新旧住民のつながりを後押しするきっかけともなった。今後さらに新旧住民が力を合わせて地域づくりに取り組んでいくことで四賀地区の活性化につながっていくのではないだろうか。

（表1）

「四賀地区のこれからを考えるワークショップ」参加者からの意見Ⅰ（抜粋）

四賀地区の魅力	昔ながらの伝統的な文化や暮らしが今も残っている／四季の移ろいを感じることができる／豊かな自然環境に囲まれた暮らしは飽きない／動物や鳥、昆虫、植物など生物の多様性が高い／水や米・野菜が美味しい／地域の人々は優しく、あたたかい。そして、程よい距離感である
四賀地区の課題	交通が不便である／道路や川・畑の中にゴミが多い／よそ者を敬遠排除している面がある／空き家が多い／松枯れの問題
四賀地区でこれから取り組んでいきたいこと	「ゆうきの里」として無農薬・無化学肥料による農業があたりまえな地域にしていきたい／遊休農地を活用した日帰り農業体験／森林の資源（松の木）を薪燃料や炭、クラフト材などとして活用／トレイルランや自転車で走れるようにコースの整備／オーガニックやパーマカルチャーの先端地域にしていきたい／宿場町のまちなみを活かした活性化／クラフトのまちにしたい

（表2）

「四賀地区のこれからを考えるワークショップ」参加者からの意見Ⅱ（抜粋）

四賀地区への移住の経緯と動機	<ul style="list-style-type: none"> ・農業を始めるにあたり有機農業に適した地域であり、松本市周辺での地産地消を思い描いていた。 ・古民家暮らしに憧れ、物件を探していたところ四賀地区の物件を見つけた。 ・ヤギの飼育とヤギのチーズ作りがしたいと思い、移住先を探していたところ、四賀地区の方と出会い、空き家を紹介していただいた。
----------------	---

(写真1)「四賀地区のこれからを考えるワークショップ」の様子



(2) 「四賀にきましょ」実行委員会への参画

「四賀にきましょ」の開催により地区内外から多くの人を呼び込み、地域に活気とにぎわいが溢れた。また、古民家カフェ「kajiya」が開催した「ご縁市」や「四賀元気プロジェクト」主催の「虚空蔵山米かつぎマラソン」との同時開催にしたことで、よりいっそう地域に盛り上がりを見せた。さらに、協議会との共催事業にしたことで、多くの住民から応援の声をいただき、当日は多くの地元の方々が会場へ足を運んでくださった。こうして、「四賀にきましょ」は回を重ねるごとに地元の方へ認知されるようになり、徐々に新旧住民が協働して地域活性化を目指し、まちづくりに取り組む姿が見られるようになってきた。また、「四賀にきましょ」のテーマでもある昔ながらの文化と暮らしやものづくりの体験を住民が講師として来場者に教えることで、ご自身の特技や趣味の発表の場ともなっており、住民のやりがいにもつながっている。このイベントを継続し、四賀地区を「クラフトのまち」としてのイメージの定着を図ることができれば、新たな地域資源や地域ブランドの確立につながるのではないだろうか。

(写真2)「四賀にきましょ」の様子



(3) 「地域の拠点づくり」構想

この構想は、協議会へ企画提案をする段階までいきながらも、拠点づくりの実現には至らなかった。その大きな要因として、協議会と農協の間で利用賃借料について話がまとまらなかったという点があるが、そういった金銭的な事由だけではなく、維持・管理のコスト面やその拠点を運営していく人的資源の問題などさまざまな課題が挙がってきた。

また、この構想の計画段階から企画提案までのプロセスのなかで、地域づくりにおいて拠点がもつ機能や可能性を広く住民に共有するまでに至らなかったことも要因のひとつのように思われる。

しかし、地域の拠点を必要だと感じている住民もいることは確かであり、こうした課題をひとつずつクリアしていくには地域の将来を見据え、中・長期的な視点で考え、住民の間で合意形成を図っていくことが求められよう。

4 3年間で振り返って

この3年間で協議会だけでなく、四賀地区地域づくりセンター、四賀公民館、四賀地区福祉ひろば、松本市社会福祉協議会四賀地区センター、四賀小学校や会田中学校など、さまざまな団体・機関の事業に参加させていただき、四賀地区内の子どもからお年寄りまで多くの人々と出会う機会をいただき、地域づくりに取り組んできた。また、四賀地区早起き野球連盟のチームに所属し、地域住民の皆さんと共に汗をかきながら楽しくプレーをし、交流を深めてきた。こうした経験を通じて多くの人と出会い、人とのつながりを広げていけたことが私の3年間の活動を支えてくれていたように思う。

そして、地域づくりにおいては人という地域資源が重要な要素であり、さらに人と人とのつながりによる歯車がかみ合うことでさまざまな力を生み出すということを実感することができた。また、地域づくりにおける地域住民の主体性を引き出すべく、地域の方々とさまざまな地域資源をつなぐ役割を果たしていくことを考えてきた。言い換えれば、地域づくりにおけるコーディネーターという役目であったが、この如何によって、地域づくりに良くも悪くも影響をもたらすということを経験し、地域づくりの奥深さや難しさを身をもって感じた。それと同時に、四賀地区の魅力と地域の人々のあたたかさを感じるが多かった3年間であった。

これらの経験から地域と関わるということは人と関わることであり、地域は人と人とのつながりによってつくられていくものなのだろうと考えた。今後も、四賀地区はもちろん、さまざまな地域と関わっていきたいと考えている。

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

奈川地区担当 松本 尚子

1 奈川地区の概要及び地域課題

奈川地区は松本市の南西に位置し、市街地から車で1時間ほど離れ、標高1,000～1,300mに14の集落が点在し、西に乗鞍岳、東に鉢盛山を仰ぐなど、周囲を2,000m以上の山々に取り囲まれる中山間地域である。高冷地のため四季がはっきりしており、夏は涼しく、冬には厳しい寒さとなる奈川地区で育つ、そばや、花豆、えごまなどの農産物が特産品である。

平成17年4月1日松本市に合併後、地区の人口は減少しており、平成30年1月1日現在、717人、世帯数は341世帯となっており、合併時と比較し人口で30%減少している。平成27年度から出生者数は0、児童生徒数は35人、65歳以上の高齢者は346人であり、高齢化率が48.3%と少子高齢化が他の地域に比べて急速に進んでいる。人口動態でみる奈川地区の特徴は、①奈川地区に高等学校がないため、中学校を卒業したら、ほとんどの児童が地区を離れ、市街地に住み高等学校に通うようになる。そのため、16～18歳の人口は、奈川地区内は0である。その際、住民票を異動させていない場合も多くあり、市の人口統計で数字上は上がってくるが、実際には地区内に住んでいないことが特徴として上げられる。高校生以外にも、働き世代や高齢者も同じような状況である。また、②地区内の企業が少ないため、地区外に仕事に出る人も多くいる。通勤が負担になるため、地区から出て市街地に住むことも多くある。そのため、高齢者は奈川地区で一人では暮らすのが困難なため市街地で暮らす子どもの家で暮らしている。また地区外の福祉施設に入所していることもある。

高齢者との会話の中で、「いつまでも奈川に居たい。でも体調が悪くなったりしたら市街地に下りないといけない…」とよく聞き、住民が「奈川に住んでよかった」と生活の中で思えるよう支える活動を目指すこととした。

2 インターンとして取り組んだ事業

(1) 奈川のくらしを語る会

奈川地区でいつまでも暮らし続けたいと思っている高齢者の声から、住み慣れた地域で暮らしていくにはどのような事が必要か勉強する会や講演会を行った。また、暮らしていて思っていることや、これからの奈川を考えて「こんなものがあつたらいい」など住民とお茶を飲みながら意見を出し合う“井戸端会議”を福祉関係職種と協力し開催した。

また、福祉ひろばの出張ミニふれ健事業の中でも、ミニ井戸端会議を開催し、奈川のくらしを語る会に参加できない住民の声を拾う場を設けた。

(2) 買い物弱者対策

奈川のくらしを語る会の井戸端会議の中で、近場の大きなスーパーまで行くには、市営バスなど使うと40～1時間ほどかかり、大きな買い物袋を提げて帰ってくるが高齢になるととても大変であるため、買い物に行く専用のバスがあれば買い物に行きやすいと意見があり、買い物支援のモデル事業として、買い物支援「おたっしゅかい」で波田地区のスーパーまでのバスの運行、買い物中の補助を行い、自分で買う楽しみと生活支援を行った。

また、JAの生活店舗の撤退があり、地域の主となる買い物店舗がなくなってしまうため、地域による生活店舗の運営について検討会を行った。

(3) ながわ子どもひろば

第1回	平成28年3月23日	「奈川地区の高齢者支援のあり方を考える」 松本大学 尻無浜教授
第2回	平成28年11月27日	「住民同士のささえあい事業について」 松本市四賀地区社会福祉協議会 四賀地区センター長 山岸勝子
第3回	平成29年2月28日	「山間地域における住民自治について」 松本大学 白戸教授 向井准教授

地区内に児童館がないため夏休みと春休みの長期休み期間に「ながわ子どもひろば」を開催した。社会福祉協議会や福祉ひろばなどと連携し、休み期間のイベントをコーディネートした。地域住民がスタッフとなり、スポーツや、調理実習などの体験活動を行い、朝から夕方まで一日を通して子どもがいられる安心・安全な居場所を提供した。

3 事業の成果

(1) 奈川のくらしを語る会

奈川のくらしを語る会を定期的で開催してきたことで、井戸端会議で話し合うことが個人の悩みや不安といったものから、「交通」・「買い物」・「暮らしの不安」と話す分野を分けてじっくり行い住民のニーズを出し合い、地域課題を住民と行政や他団体と共有と把握した。

平成29年4月に地域づくり協議会「ふるさと奈川をおこす会」が発足し、地域振興部会、教育・健康・福祉部会、防災・安全・環境部会の各3部会で取り組む課題となった。

(2) 買い物弱者対策

地域づくり協議会「ふるさと奈川をおこす会」の教育・健康・福祉部会の早急な取り組み項目として買い物弱者対策が上げられ、買い物支援「おたっしゅかい」を実施した。利用者から、「奈川では買えない物が買えた」、「商品を実際に見ると予想していたよりも買っていた」など感想があり実施して良かった点もあるが、反省点が多くある事業であった。利用したいという声はあるが、毎回の参加者が2名程度であり、広報が住民に届いていないこと

や、利用しやすい日程にするなど配慮が不足していたことがあった。また、継続できる体制づくりや、運行する車両について課題が上がった。

JAの生活店舗撤退など様々な課題がある奈川地区で、地域振興や地域活性の他、生活支援を自らが行えるよう、地域運営法人を検討している。その法人の業務として買い物サービスなどを行えるようにし、住み慣れた奈川地区で元気にいつまでも暮らして行きたい願いを達成できるように準備を行っている。

(3) ながわ子どもひろば

子どもが減少してきたことで、福祉ひろばや社会福祉協議会で行われていた子ども向けイベントも少なくなっていたが、本事業を開催したことにより再び各団体の動きが出るようになった。高齢者クラブや地域住民も協力者になることで、役割の創出と世代間交流も行うことができた。家に子どもだけを残していることを心配する保護者の解消だけではなく、子ども達の長期休み期間の有意義な場所となった。

また、小学校との関わりが生まれ、児童と地域の特産品であるえごま栽培や収穫したえごまを使用した調理実習を通して奈川地区の特色の学習を行い活動の幅の広がりが出た。小学校側も、学校と地域の交流を求めているため、えごま栽培を通して地域の高齢者が講師となり地域文化の学習や世代間交流の場となった。インターンとして活動してきた中でできた人脈を紹介することで、高齢者の活躍の場を提供することができた。

4 3年間で振り返って

松本市地域づくりインターンとして奈川地区に配属になり、住まいを奈川地区に移し、隣近所の関わり、町会や地区の行事など日々過ごす中から地区の状況や課題を見て、聞いて、住民が「奈川に住んでよかった」と思える活動を行ってきたが、地域がインターンを受け入れてくれたため、上記にある事業などを行っていくことができたと感じている。地域の中で何か始めようとしても、一人でできることはなく、協力をしてくれる住民がいたからこそできていることであった。

しかし、運営や準備の段階は行政職員や、福祉の専門職と行ってきたため、地域の人と協力し合い地域に残る形で活動ができず3年が過ぎてしまった。地区課題にも上げたが、担い手となる年代層が少ないことや、松本市に合併する前は、行政や社会福祉協議会が中心となり地域づくりをしてきた経過があり、住民主体が叫ばれる昨今の地域づくりがまだ住民に浸透していないように感じている。そういった住民意識を少しでも変えていくには、とても短い3年間であった。

松本市地域づくりインターンとして任期を終えてしまうが、地域で活動してきたことは自分の血肉になっており、今後もこの3年間で得た経験を活かしていきたく考えている。

写真資料

(1) 奈川のくらしを語る会



(2) 買い物弱者対策



(3) ながわ子どもひろば

